

資 料

日本人幼児の韻の感受性と拗音表記法の習得

遠 藤 めぐみ*

PHONOLOGICAL AWARENESS OF JAPANESE YOUNG CHILDREN AND LEARNING
TO READ AND WRITE YOO-ON (SMALL-SIZED KANA CHARACTER)

Megumi MISAWA ENDO

The purpose of this study was to investigate how the awareness of phonemes relates to the learning of reading and spelling of Yoo-on (Yoo-on is a small-sized kana character which changes the high front vowel of the preceding syllable to a semivowel and adds a new vowel, for example, [ki] + [ja] → [kja]). Sixty children aged five to six were given phonemic awareness tests, reading and spelling tests, and the Shiba Picture Vocabulary Test. Two types of phonemic awareness tests were given based on the detection of either the first consonant or the end vowel. The performance levels of both of them proved quite high. Performances in the phonemic awareness tests were found to be related to performances in the Yoo-on reading and spelling tests.

Key words : phonological awareness, awareness of phonemes, Japanese children, reading and spelling of Japanese Yoo-on, literacy.

問題と目的

近年、英語圏において、読みの習得と音韻的自覚の発達の関係について、多くの研究が蓄積されてきた(概観は, Bryant and Goswami, 1987 ; Wagner and Torgesen, 1987. メタ・アナリシスは Wagner, 1988)。日本語においても、かな文字の習得と音韻的自覚の発達の関係についての研究がある(天野, 1970, 1986)。

さて、遠藤(1990)の調査では、特別な文字教育を受けない就学前の幼児が拗音の表記法をかなりの程度習得していることが示された。さらに、その習得過程において、幼児は、拗音の33音節を個々に習得するのではなく、10音節ぐらいの表記法を習得するまでに表記ルールを抽出し、そのルールを用いて他の未習得の音節の読み書きを推量していくことが示唆された。そのような表記ルールの習得および適用には、音節レベルの音韻的自覚のみでなく、音素レベルの音韻的自覚が

関係することが予想される。しかしながら、日本人の幼児が音素レベルの音韻的自覚をどの程度持っているかについての研究は今までほとんどない。また、それが読み書きの習得とどのような関係にあるかについての報告はなされていない。

従来の天野によるかな文字の習得についての研究報告(1970, 1986, 1987)では、音節レベルの音韻的自覚が扱われたが、音素レベルの音韻的自覚については研究されていない。Mann (1986) による交差文化的研究、および Mann の研究に触発されて行われた Spagnoletti, Morais, Alegria, and Dominiczy (1989) による研究では、日本人小学生の音素レベルの音韻的自覚が調べられたが、それと日本語の読み書きの習得との関係は研究されていない。また、音韻的自覚を測るために彼らが用いた課題の多くは、認知的に複雑で、幼児には困難であることが指摘されている(Knaflle, 1973, 1974 ; Lenel and Cantor, 1981 ; Bryant and Goswami, 1987)。実際、彼らの研究では、日本人の小学校1年生は、音素レベルの課題で成功しなかった。

* 帝京大学文学部心理学科 (Department of Psychology, Teikyo University)

そこで、本研究は、第1に、認知的負荷がより少ない課題を用いれば、日本人の幼児でも音素レベルの韻について感受性を有する、という予測を検討することを目的とした。第2に、音素レベルの音韻的自覚の程度は、拗音の読み書きの習得と関係する、という予測を検討することを目的とした。

そのために、第1に、音韻的自覚を測定するための最も容易な課題であることが指摘されている、共通の韻を持つ単語を検出する課題 (Knafle, 1973, 1974; Lenel and Cantor, 1981; Bryant and Goswami, 1987) を参考に、日本語で、音素レベルの韻の感受性を測るための課題を考案し、幼児を対象に実施した。第2に、拗音の読み書きの習得状況を調べ、それと音素レベルの韻の感受性との関連を調べた。本研究では、特殊音節の中でも特に表記法の習得が難しいことが指摘されている拗音のみを扱ったが、拗音以外に、かな文字の特殊音節の長音、拗長音の表記法の習得についても、本研究の結果は示唆を与えるであろう。

方 法

被験児

幼稚園年長児60人 (男37人、女23人) を対象とした。実施時の月齢は5;7~6;5 (メディアン6;0) であった。対象とした幼稚園では、平仮名50音の書き方や絵本の読みを指導しているが、拗音表記法は特に指導していない。

手 続

音素レベルの韻の感受性を測るための2種類の課題、すなわち語頭子音の一致の検出課題と尾母音の一致の検出課題、拗音とかな文字の読み書きについての課題、および、語彙能力をコントロールするために用いた芝式語彙検査が、4回のセッションに分けて、個別に実施された。初めの2回のセッションには韻の感受性課題が、3回目には読み書き課題が、最後のセッションには語彙検査が実施された。2種類の韻の感受性課題については、半数の被験児は語頭子音課題、尾母音課題の順に、残りの半数の被験児はその逆の順に、呈示された^{**}。各課題の所要時間は、1人につき、1回のセッションが20分前後、4回合わせて70分前後であった。実施時期は1989年、9月~11月であった。

(1) 韻の感受性

幼児に音素レベルの韻の自覚があるか否かを調べるために、拗音および直音を語頭に持つ単語で構成された材料を用いた。

語頭子音の一致の検出 共通の子音で始まる音節を

選ぶ課題を考案した。各試行は、ターゲットとなる音節、選択肢となる2つの音節、すなわち、ターゲットと同じ子音で始まる音節、およびそれと異なる子音で始まる音節、をそれぞれ含む単語の組 (例: きゃく・きゅう・りゅう) から成る^{***}。音節の全体的類似性の影響を除くために、選択肢となる2つの音節は、同じ母音を持つように選ばれた。4回の練習試行に続き、24回の実験試行が行われた。実験試行は、拗音 (か行とき行) と直音 (か行とき行)、を語頭に持つ単語の組から構成された。各試行において、課題から記憶の負担を取り除くために、各単語を表わす3枚1組の絵が用いられた。各試行の呈示順序は、被験児が替わるごとによく切つてランダム化された。

練習試行で、被験児は、3枚1組の絵を示され、「これは音当てゲームです。お姉さんの言うことばを良く聞いて同じ音で始まる絵を選んでね。(絵をさしながら) “ひょう”, “ひゃく”, “みゃく”。“ひょう”の“ひょ”と同じ音で始まるのは“ひゃく”の“ひゃ”かな, “みゃく”の“みゃ”かな? よく音を聞いてみると, “ひょ”

^{**} 被験児は、男女別に、月齢によってマッチングされた2群に分けられ、第1の群は語頭子音の一致の検出、尾母音の一致の検出の順、第2の群は逆の順で、2セッションを行った。各群ごとに遂行を比較した結果、語頭子音の検出については、第1の群の方が第2の群よりも得点が高く、その差は有意だった ($t=2.91, df=58, p=0.01$)。尾母音の検出については、2群の差は有意でなかった ($t=0.20, df=58, p=0.84$)。課題の呈示順序の影響が、なぜ語頭子音の遂行に見られるかについては、明らかではない。ただし、被験児全体については、呈示順序の差が相殺されるように計画されているため、全体の結果には影響しないものと思われる。

語頭子音の検出については群間に差がでたが、尾母音の検出については群間に差がなかったことから、2群間に最初から差があったとは考えにくい。語頭子音の検出で有意差が生じたのは、課題の呈示順序が影響したと考えられる。最初に行われた課題の性質と困難度が、後の課題に影響した可能性がある。

^{***} 韻の感受性課題および拗音の読み書き課題において、拗音節のみにて課題を構成することが、理論的には必要と考えられたが、実際には、一部、拗長音を用いることになった。それは、以下に示すように、幼児の語彙を用いて、拗音節のみでカ行拗音およびサ行拗音の課題を作成することが不可能であったためである。なお、カ行とサ行を選んだのは、Mann (1986) の先行研究との比較を行うためであった。幼児を対象にした、おともやすおみ・さちこ作絵、しおのよねまつ文「おみちゃん さっちゃんの こどもえじてん」(求龍堂)に収録されている拗音節で始まる単語は、「きゃ」は4個、「きゅ」は0、「きょ」は2個、「しゃ」は11個、「しゅ」は2個、「しよ」は1個である。参考までに、小学生を対象にした、村石昭三監修「かどかわ ことば えじてん」(角川書店)に収録されている拗音節で始まる単語は、「きゃ」が5個、「きゅ」が0、「きょ」が5個、「しゃ」が12個、「しゅ」が4個、「しよ」が5個であった。

と“ひゃ”は同じ音で始まるけれども、“ひょ”と“みゃ”は違う音で始まるでしょ。***ちゃんも一緒に言っ
てごらん。“ひょ”、“ひゃ”、“みゃ”(絵をさしながら、被
験児に後をついて発音させる)。それでは、“ひょ”と同じ音
で始まるのは“ひゃ”かな“みゃ”かな?というよう
に、やり方と正答を教えられた。実験試行では、被
験児は、3枚1組の絵を示され、「(絵をさしながら)“き
ゃく”の“きゃ”、“きゅう”の“きゅ”、“りゅう”の
“りゅ”。***ちゃんも一緒に言っ
てごらん。“きゃ”、“きゅ”、“りゅ”(絵をさしながら、被
験児に後をついて発音させる)。“きゃ”と同じ音で始まるのは“きゅ”
かな“りゅ”かな?というように、二者択一の質問
をされた。

尾母音の一致の検出 共通の母音で終わる音節を選
ぶ課題を考案した。ターゲットとなる音節、選択肢と
なる2つの音節、すなわち、ターゲットと同じ母音で
終わる音節、およびそれと異なる母音で終わる音節
(例. りゅ・きゃ・きゅ)ではじまる単語の組から成る、4
回の練習試行および24回の実験試行を用意した。全体
的類似性の影響を除くために、選択肢となる2つの音
節は、同じ子音で始まるように選ばれた。各試行の単
語の組は、語頭子音の一致の検出で用いたのと同じも
のが、ターゲットを入れ換えて用いられた。被験児は、
練習試行でやり方と正答を教えられ、実験試行では、
「(絵をさしながら)“りゅう”の“りゅ”、“きゃく”の
“きゃ”、“きゅう”の“きゅ”。***ちゃんも一緒に
言っ
てごらん。“りゅ”、“きゃ”、“きゅ”(絵をさしながら、
被
験児に後をついて発音させる)。“りゅ”と同じ音で終わる
のは“きゃ”かな、“きゅ”かな?というように質問
された。各試行の呈示順序は、被験児が替わるごと
によく切ってランダム化された。

(2) 拗音とかな文字の読み書き

読 語頭子音の一致の検出でターゲットとして
用いられた単語、すなわち拗音を含む12単語と直音か
らなる12単語の計24単語、が用いられた。各単語は、
縦3cm、横6cmのカードに書かれて、呈示された。実
験試行の前に、練習試行として、拗音を含む3単語お
よび直音から成る3単語が、1つずつ呈示され、単語
としてのまとまりをもって(拗音の部分であれば逐次的で
なく拗音的に)読むように、正答のフィードバックが与え
られた。各試行の呈示順序は、被験児が替わるごと
によく切ってランダム化された。

構 成 実際に文字を「書く」課題の代わりに、遠
藤(1990)に倣い、1枚に1文字のひらがなが書かれた
ひらがなカード(3cm×3cm)を用いて、求められた音節

を構成する課題が用いられた。文字カードには「小
さい文字」のカードも含まれている。従って、これは正
確には「書き」の課題とはいえない。しかし、構成課
題では、文字の形態を思いだしたり書いたりすること
に費やされる処理負担が軽減され、拗音の表記法につ
いての幼児の知識がより正確に反映されと考えられ
るので、本研究の目的にとってより適切であるものと
思われる。

材料は、読み課題と同じである。被験児は、韻につ
いての感受性の課題で用いられた絵を呈示され、「これ
は“しゃべる”ですね。“しゃべる”の“しゃ”はどう
書くの?」というように質問され、単語の語頭の1音
節のみを、文字カード(「し」と「ゃ」)で構成すること
が求められた。実験試行の前に、練習試行として、読み
に用いられたのと同じ6単語が用いられ、正答の
フィードバックが与えられた。各試行の呈示順序は、
被験児が替わるごとによく切ってランダム化された。

(3) 芝式語彙検査

芝式語彙検査(C-Q)の結果は、平均16.13(満点
30)、標準偏差4.38であった。

結果と考察

各課題における被験児の遂行レベルを述べた後に、
課題間の関係について述べる。

遂行レベル

(1) 韻の感受性

語頭子音課題と尾母音課題には、拗音節と直音節が
用いられている****。そこで、まず、課題および音節
の種類によって遂行が異なるかどうかを見るために、
語頭子音と尾母音、拗音と直音を要因として、被験者
内2要因分散分析をした。TABLE 1に、各条件の平均
と標準偏差を示した。分散分析の結果、交互作用が有
意傾向であった($F(1,59)=3.62, p<.10$)。

各要因の単純効果を分析した結果、語頭子音と尾母
音の要因は拗音水準においても直音水準においても有
意であった(順に、 $F(1,59)=18.43, p<.01$ 、 $F(1,59)=5.90, p<$

**** Mann(1986)の音素削除課題において、日本の小学校4年
生と6年生が、[ɕ]で始まる語よりも[k]で始まる語で多く
正答したことが報告されているため、本研究でも、か行とさ行
で始まる単語を用いた。か行とさ行の遂行を、対応のある平均
の検定によって比較した結果、語頭子音課題では平均の差は有
意であり($t=2.95, df=59, p=0.01$)、さ行の平均がか行の平均
よりも高かった。尾母音課題では平均の差は有意でなかった
($t=1.91, df=59, p=0.12$)。課題が異なるため、直接比較する
ことはできないが、以上の結果はMannの結果と一致しない。
本研究ではか行とさ行の違いには関心がないので、結果の分析
では、両者の得点を合計して扱った。

TABLE 1 韻の感受性課題の平均と標準偏差 (n=60)

	Max=12 語頭子音課題		尾母音課題	
	拗音	直音	拗音	直音
平均	9.12	8.22	7.37	7.23
標準偏差	2.31	2.58	2.67	2.28

05)。TABLE 1に見られるように、拗音水準においても直音水準においても、語頭子音課題の方が尾母音課題よりも遂行が高かった。この結果は、Spignoletti et al. (1989)の制約付き分類課題で、日本人の小学校1年生が、共通の子音に従った分類には成功したが、共通の母音に従った分類には成功しなかったことと一致する。語頭子音課題の方が尾母音課題よりも成績が高い理由としては、仮名文字の50音を覚える際に、語頭子音が共通する行(例.かきくけこ)を1つのまとまりとして暗唱していることが影響する可能性が考えられる。しかし、この推量の妥当性については、本研究からは明らかにはならない。

また、拗音と直音の要因は語頭子音水準においては有意であったが($F(1,59)=7.25, p<.01$)、尾母音水準においては有意でなかった($F(1,59)=0.18, n.s.$)。TABLE 1に見られるように、語頭子音水準においては拗音の方が直音よりも遂行が高かった。つまり、拗音との遂行の差が見られたのは、拗音の場合、子音直音という音節の種類の違いは、語頭子音の検出の遂行には違いをもたらしたが、尾母音の検出には影響しなかった。語頭子音水準において拗音と直音との遂行の差が見られたのは、拗音の場合、子音母音の間に半母音が発音されることが、子音と母音の分離を容易にし、語頭子音の認知を助けたという可能性も推測されるが、本研究からは明らかでない。

次に、課題による遂行の違いを個別に見るために、語頭子音課題と尾母音課題の遂行の同時分布をとり、両課題の成績を比較してみた。その結果、語頭子音課題で尾母音課題よりも高い成績をとった人数は40人であるのに対して、その逆は12人であり(タイは8人)、その差は有意であった(サイン検定における正規近似の結果、 $z=-4.02, p<.001$)。この結果は、群間の平均を比較した先の分散分析の結果と一致するのみならず、個別に見ても同様の有意差が見られることを示す。これらの結果から、韻の感受性の発達においては、語頭子音についての感受性が、尾母音についての感受性に先行するという可能性も考えられる。

さて、正答率75%以上を課題達成の任意な基準とす

ると、語頭子音課題でこの基準に達した被験児数は、拗音では39人(被験児全体の65%)、直音では28人(46.7%)であった。尾母音課題でこの基準に達した被験児数は、拗音では21人(35%)、直音では16人(26.7%)であった。従来のMann (1986)の研究では、日本人の小学校1年生のうち、音素数え課題に成功したのは10%程度であったが、本研究では、それに比べるとずっと多くの幼児が韻の感受性課題に成功した。したがって、認知的な負荷がより少ない課題を用いれば、日本人の幼児も音素レベルの課題に成功するといえる。日本人の幼児の音素レベルの音韻的自覚を調べるには、従来の研究で多く用いられてきた音素数え課題や音素削除課題のような認知的に複雑な課題よりもむしろ、本研究で用いた韻の感受性課題のような認知的な負荷がより少ない課題を用いることが適切であるものと思われる。

なお、韻の感受性課題の遂行において、音のみで判断するのではなく、まず表記法を思い浮かべてから判断するという可能性もある。表記法の習得が音の認知に及ぼす影響は、本研究からは吟味することができないが、今後の課題として興味深いものである。ただし、本研究の被験児が、音と文字とを同一視しているわけではないことは、韻の感受性課題の直音における成功、および、拗音節の読み書きができなくても韻の感受性課題に成功する被験児がいること(TABLE 3, 4)から、明らかである。

以上の結果から、日本人の幼児でも、音素レベルの韻についての感受性を有する、という第1の予測が支持された。さらに、尾母音の韻の検出よりも語頭子音の韻の検出の方が容易であること、語頭子音課題においては直音よりも拗音の方が容易であること、が見いだされた。

(2)読みと構成

直音の読みと構成 正答率75%以上に達した被験児数は、60人中、読みは55人(被験児全体の91.7%)、構成は53人(88.3%)であった。本研究の被験児のほとんどは、ひらがなの直音の読みをかなり習得しているものと思われる。

拗音の読みと構成 読みと構成のいずれも、U字形分布をとった。読みの場合、正答率75%以上の被験児数は30人(50.0%)、25%以下は22人(36.7%)であった。構成の場合、正答率75%以上の被験児数は25人(41.7%)、25%以下は32人(53.3%)であった。拗音表記の習得がU字形分布をとるという結果は、拗音33音節すべてについて、5～6歳代児の読みと構成の遂行を調査した遠藤(1990)の結果と一致する。以下では、読

みと構成課題の得点は、5段階の順位尺度に変換されて、分析に用いられた*****。

変数間の相関

TABLE 2に見られるように、韻の感受性の各課題間の相関は有意であった。語頭子音直音と語頭子音拗音の間、語頭子音拗音と尾母音拗音の間、尾母音拗音と尾母音直音の間には、中程度の相関が見られた。それ以外の変数間には弱い相関しかなかった。芝式語彙検査と韻の感受性との相関は低かった。

TABLE 2 各変数間の相関係数 (括弧内は、芝式語彙検査の影響を除いたときの偏相関係数)

n=60	芝式語彙検査	語頭子音		尾母音		拗音読み	拗音構成
		拗音	直音	拗音	直音		
芝式語彙検査	1.00						
語頭子音拗音	0.18	1.00					
語頭子音直音	0.26*	0.64**	1.00				
尾母音拗音	0.16	0.52**	0.36**	1.00			
尾母音直音	0.27*	0.27*	0.33**	0.49**	1.00		
拗音読み	0.39**	0.15 (0.08)	0.30* (0.22)	0.23 (0.18)	0.41** (0.34**)	1.00	
拗音構成	0.39**	0.29* (0.25)	0.27* (0.19)	0.31* (0.28*)	0.48** (0.42**)	0.78**	1.00

* $p < .05$, ** $p < .01$

韻の感受性と拗音の読み・構成との関係

TABLE 2に示されたように、語頭子音課題の直音と拗音の読み、尾母音課題の直音と拗音の読みとの間に有意な相関が見られた。また、韻の感受性についての全ての課題と拗音の構成との間にそれぞれ有意な相関が見られた。

語頭子音課題における拗音の感受性および尾母音課題における拗音の感受性とも、拗音の読みとの間に相関が認められなかった。また、相関が比較的高かったのは、両課題とも直音のほうであった。それらの原因について、さらに実験を重ね、検討することは今後の課題である。

***** 拗音の読みと構成のものと得点について、0を1へ、1～3を2へ、4～8を3へ、9～11を4へ、12を5へ、それぞれ変えた。

次に、語彙能力の影響をコントロールするために、芝式語彙検査の影響を除いた偏相関係数を求めた。その結果、TABLE 2の括弧内に見られるように、尾母音課題の直音と拗音の読み、尾母音課題の拗音と拗音の構成、および尾母音課題の直音と拗音の構成の間で、芝式語彙検査の影響を除いてもなお、有意な相関が見られた。一方、語頭子音課題と拗音の読みや構成との間の偏相関係数は有意でなかった。つまり、拗音の読みや構成の習得において、尾母音を正しく認知できるようになることが、より大きな役割を果たしているものと考えられる。それは、語頭子音課題よりも尾母音課題の方が難しいという結果と関連するものと思われる。

さらに、語頭子音と尾母音の両課題における遂行が、拗音の読みと構成の遂行の程度と関連するかどうかを調べた。その際、各課題とも正答率75%の基準に達した場合を成功と見なすことにした。TABLE 3は、語頭子音と尾母音の両課題で基準に達したか否かの別に、拗音の読みが成功した者としなかった者の人数を集計したものである。カイ二乗検定の結果、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(2)=7.76, p<.05$)。残差分析を行った結果、語頭子音と尾母音の両課題ともに成功しない場合では、拗音の読みで成功する者は少なくなり ($t=-2.07, p<.05$)、語頭子音と尾母音の両課題ともに成功した場合は、拗音の読みで成功する者が増えるということがわかった ($t=2.53, p<.05$)。したがって、韻の感受性課題で成功するほど、拗音の読みでも成功するといえる。

同様に、TABLE 4には、語頭子音と尾母音の両課題での遂行による、拗音の構成の成功者、失敗者の人数を示した。カイ二乗検定の結果、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(2)=7.2, p<.05$)。残差分析を行った結果、語頭子音と尾母音の両課題ともに成功しない場合では、拗音の構成で成功する者は少なくなり ($t=-1.93, p<.1$)、語頭子音と尾母音の両課題ともに成功した場合は、拗音の構成で成功する者が増えるということがわかった ($t=2.39, p<.05$)。したがって、韻の感受性課題で成功するほど、拗音の構成でも成功するといえる。

以上の結果から、音素レベルの音韻的自覚の程度は、拗音の読み書きの習得と関係する、という第2の予測が支持された。

結 論

今まで、アルファベットを用いず、1音節1文字の仮名文字を用いる日本人が音素レベルの音韻的自覚を持つか否かについては、幼児を対象としては、調べら

TABLE 3 語頭子音と尾母音課題の遂行による拗音の読みの成績別人数

語頭子音課題および 尾母音課題の正答率		両者とも 75%未満	一方が75%未満で 他方が75%以上	両者とも 75%以上	計
拗音読み の正答率	75%未満	18	11	1	30
	75%以上	10	12	8	30
計		28	23	9	60

TABLE 4 語頭子音と尾母音課題の遂行による拗音の構成の成績別人数

語頭子音課題および 尾母音課題の正答率		両者とも 75%未満	一方が75%未満で 他方が75%以上	両者とも 75%以上	計
拗音構成 の正答率	75%未満	20	13	2	35
	75%以上	8	10	7	25
計		28	23	9	60

れていなかった。また、従来は、仮名文字の習得と音節レベルの音韻的自覚の関係のみが問題とされ、日本語の文字の習得において、音素レベルの音韻的自覚がどのような役割を果たすかについては、調べられていなかった。

しかし、本研究によって、日本人の幼児でも音素レベルの韻について感受性を有すること、さらに、音素レベルの音韻的自覚の程度は拗音の表記法の習得と関係すること、が見いだされた。日本人の幼児は、このような音素レベルの音韻的能力を基盤として、拗音節の表記ルールを推論したり、それを未習得の拗音節に適用したりするものと考えられる。拗音節以外の特殊音節の表記法の習得にも、同様のプロセスが存在することが予測される。この点については、さらに研究が必要である。

今後の課題は、第1に、音素レベルの音韻的自覚と拗音以外の特殊音節、特に長音と拗長音の表記法の習得との関連を調べること、第2に、日本人の子供において音素レベルの音韻的自覚の発達の道筋を調べること、第3に、アルファベット圏と比べると日本語においては音素レベルの音韻的能力が仮名の読み書きの習得にそれほど大きな役割を果たさないにもかかわらず、日本人が発達するにつれて音素レベルの音韻的能力を獲得していく原因を探ること、である。

最後に、本研究で扱った音素レベルの韻についての感受性は、言葉の音としての響きを味わうことにも関与するものと思われる。本研究で得られた知見からは多少飛躍するが、言葉の意味は、文字として書き表わ

されたもののみに存在するのではなく、言葉の響き、間、韻律の特徴、言葉の語られる状況、など、様々な側面によって創造されるものと考えられる。これらの諸側面の認知と意味の理解の発達について研究することも望まれるであろう。

引用文献

- 天野清 1970 語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の読みの学習 教育心理学研究, 18(2), 76—89.
- 天野清 1986 子どものかな文字の習得過程 秋山書店
- 天野清 1987 展望：音韻分析と子どもの Literacy の習得 教育心理学年報, 27, 142—146.
- Bryant, P. and Goswami, U. 1987 Phonological awareness and learning to read. J.R. Beech and A.M. Colley (Eds.) Cognitive approaches to reading.
- 遠藤めぐみ 1990 幼児の拗音節の読み書きの習得過程 教育心理学研究, 38(2), 213—222.
- Knafle, J.D. 1973 Auditory perception of rhyming in kindergarten children. *Journal of Speech and Hearing Research*, 16, 482—487.
- Knafle, J.D. 1974 Children's discrimination of rhyme. *Journal of Speech and Hearing Research*, 17, 367—372.
- Lenel, J.C. and Cantor, J.H. 1981 Rhyme recognition and phonemic perception in young children. *Journal of Psycholinguistic Research*, 10(1), 57—67.
- Mann, V. 1986 Phonological awareness : The role of reading experience. *Cognition*, 24, 65—92.
- Spagnoletti, C., Morais, J., Alegria, J., and Dominicy, M. 1989 Metaphonological abilities of Japanese children. *Reading and Writing : An Interdisciplinary Journal*, 2, 221—244.
- Wagner, R.K. 1988 Causal relations between the development of reading skills : A meta-analysis. *Merrill-Palmer Quarterly*, 34(3), 261—279.
- Wagner, R.K. and Torgesen, J.K. 1987 The nature of phonological processing and its causal role in the acquisition of reading skills. *Psychological Bulletin*, 101(2), 192—212.

付録：韻の感受性課題

<u>き</u> ょう	<u>き</u> ゃく	<u>に</u> ゃんこ
<u>き</u> ょうだい	<u>き</u> ゃべつ	<u>ち</u> ゃわん
<u>き</u> ゃく	<u>き</u> ゅう	<u>り</u> ゅう
<u>き</u> ゃべつ	<u>き</u> ゅうす	<u>ぴ</u> ゅーま
<u>き</u> ゅう	<u>き</u> ょう	<u>み</u> ょうじ
<u>き</u> ゅうす	<u>き</u> ょうだい	<u>ひ</u> ょうし
<u>し</u> ょくじ	<u>し</u> ゃこ	<u>に</u> ゃんこ
<u>し</u> ょうかき	<u>し</u> ゃべる	<u>ち</u> ゃわん
<u>し</u> ゃこ	<u>し</u> ゅるい	<u>り</u> ゅう
<u>し</u> ゃべる	<u>し</u> ゅうり	<u>ぴ</u> ゅーま
<u>し</u> ゅるい	<u>し</u> ょくじ	<u>み</u> ょうじ
<u>し</u> ゅうり	<u>し</u> ょうかき	<u>ひ</u> ょうし
<u>こ</u> ま	<u>か</u> に	<u>な</u> し
<u>こ</u> や	<u>か</u> み	<u>た</u> ね
<u>か</u> に	<u>く</u> ま	<u>る</u> びー
<u>か</u> み	<u>く</u> り	<u>ぷ</u> りん
<u>く</u> ま	<u>こ</u> ま	<u>も</u> も

<u>く</u> り	<u>こ</u> や	<u>ほ</u> し
<u>そ</u> ら	<u>さ</u> い	<u>な</u> し
<u>そ</u> り	<u>さ</u> る	<u>た</u> ね
<u>さ</u> い	<u>す</u> な	<u>る</u> びー
<u>さ</u> る	<u>す</u> し	<u>ぷ</u> りん
<u>す</u> な	<u>そ</u> ら	<u>も</u> も
<u>す</u> し	<u>そ</u> り	<u>ほ</u> し

付 記

いつも暖かくお励まし下さいました東京大学教育学部の芝祐順教授，お茶の水女子大学の無藤隆助教授に感謝致します。調査にご協力頂きました板橋富士見幼稚園（安見克夫園長）の皆様に感謝致します。また，芝祐順教授には，芝式語彙検査の使用を快諾して頂きました。結果の分析の一部に，篠原弘章著「行動科学のBASIC（ナカニシヤ出版）」のプログラムを使用させて頂きました。本研究は，小平記念会第2回家庭教育奨励金の補助を受けました。記して感謝致します。

（1991年2月13日受稿）